

令和2(2020)年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)  
 実績報告書(プログラム実施報告書)  
 (研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)  
 (ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI)」

課題番号： 20HT0136

プログラム名：「ユマニチュードってなあに？～私にもできるお年寄りにやさしいケア～」



所属 研究 機関	名称	富山県立大学
	機関の長 職・氏名	学長 下山 勲
実施 代表者	部局	看護学部
	職	教授
	氏名	越田美穂子

開催日	令和2年12月12日(土)
実施場所	富山県立大学 看護学部 富山キャンパス
受講対象者	高校1、2年生
参加者数	34名
交付申請書に記 載した募集人数	20名

プログラムの目的

- 1)本テーマに関心を持つ県内高校生を対象に、本科研の主な介入方法であり、先進的な包括的ケア技法である、『ユマニチュード』について、見る・触れる・話すといった基本的な技法の考え方や概要を、講義や演習を通して理解し、興味関心を促す。
- 2)本研究の客観的評価に使用する機器の測定方法を実際に見学することで、工学と看護学の研究における連携方法や、大学における研究がどこでどのように行われているのかについて理解し、興味関心を促す。

プログラムの実施の概要

1.プログラムの工夫や留意点

プログラムは、挨拶、オリエンテーションの後にまず科研費の説明を行い、このプログラムの主旨を理解してから具体的な講義や演習に移行する企画としたことで、なぜこの内容が研究と関連するのか、その介入内容と評価方法を時系列で理解しやすく学ぶ構成になっていたと考える。

講義は、動画を効果的に用い高校生にも理解しやすい内容とした。また演習時にはなるべく他校の学生とペアになるようにし、距離を保ちながら演習ができるよう内容を工夫した。またその実演中に実際に視線測定をどう実施するのかを実践し、その体験を講義につなげる等の工夫も行った。

さらに受付から最後のアンケート回収まで、学部2年生を中心とした看護学生のボランティアが、6-8人のグループを担当し、不安の軽減と親近感を醸成できるよう配慮した。特に導入における自己紹介や学生自身がユマニチュードを学んだ感想を直接高校生に伝える内容は、次の講義へのスムーズな移行に役立ったと考える。

またプログラムは、高校生の注意力を維持するため45分単位の講義・演習とし、合間に休憩を入れて気分転換を行った。さらに講義や演習は、距離を保ちながら経験できる内容となるよう工夫した。

## 2.当日のスケジュール

- 1) 13:00-13:20 受付・資料配布・会場と座席案内(手指消毒・体温測定・写真撮影許可の確認)
- 2) 13:20-14:00 挨拶・科研費によるセミナーの説明・オリエンテーション・ゲームを兼ねた自己紹介  
ボランティア学生によるユマニチュードを学んでの感想
- 3) 14:00-14:05 休憩・換気
- 4) 14:05-14:50 講義「ユマニチュードってなあに? ~私にもできるお年寄りにやさしいケア~」
- 5) 14:50-15:00 クッキータイム・休憩・換気
- 6) 15:00-15:45 演習「やってみよう! やさしいユマニチュードを活用したケア技法」
- 7) 15:45-15:50 休憩・換気
- 8) 15:50-16:15 実演・見学「優しいケアの効果を工学の力を使って測ってみよう!」
- 9) 16:15-16:30 まとめと質疑応答・修了証の授与・アンケート実施
- 10) 16:30- 終了の挨拶・アンケート回収後解散

## 3.実施の様子

講義や演習、実演では、ユマニチュードの技術を一貫して学べるように、「見る」技術に特化して実施した。その際は、人形の使用や、看護学生のボランティアによるデモンストレーションを取り入れた。



【講義:「ユマニチュードってなあに?」では、ぬいぐるみを使って「見る」をわかりやすく説明】



【演習:ボランティア学生をモデルに実演】



【効果評価のための測定器具について説明】



【測定実演:画面を使って測定場面を確認】



【ボランティア学生によるグループ支援】

実施後のアンケートは34名全員が回答していた。結果は、「講義を聞いて内容に興味関心が持てたか」については31人(91.1%)が『持てた』と答え、『かなり持てた』を含めると全員が興味を持ったと答えていた。具体的には、「ユマニチュードについてその効果や大切さがよくわかった」「動画を見て看護師の接し方で相手が変わる」「ユマニチュードを使う事で表情や感情を良い方向にしてくれる」「日常生活で誰でも使えそうだった」等の意見が多く見られた。

また「演習・実演に参加して興味関心が持てたか」については、29人(85.31%)が『持てた』と答え、『かなり持てた』は4人(11.8%)を含めるとほとんどの高校生が興味を持ったと答えていた。具体的な意見としては、「ユマニチュードの『見る』技術で相手の気持ちや伝えたいことを感じる事ができた」「ユマニチュードを実際に体験して感じ方の違いが分かった」等の意見が多く、実体験の効果が大きいことがうかがわれた。

さらに「研究への興味関心が持てたか」については、22人(64.7%)が『持てた』と答え、『かなり持てた』は11人(32.4%)であり、これも9割以上の高校生が興味を持ったと答えていた。具体的には、「いろいろな研究がされており、大学での研究についてもっと知りたいと思った」「看護と工学をつなげることで看護の力が向上するところ」「大学でどんな研究をしているのか知ることができ良い体験だった」「今の生活に研究が活用できるところ」「ケアを測定機器で数値化できるところ」に興味を持てたという意見が多かった。

全体を通しての感想として「参加してよかった」「ペアの人と楽しく演習ができた」「今後も学びたいし、生活に活かしたい」「ユマニチュードを学べる大学が県内にあるのを知れてうれしかった」等の意見が見られ、全体に興味関心も高くなり、また今後の生活にも生かしたいという意欲にもつながっていた。

これらの結果から、このプログラムの目的は達成できたと考える。

#### 4.事務局との協力体制

科研費担当の事務職員には、実施における物品購入や配布物準備、参加者の名簿作成等の事務、また参加者への連絡調整、当日の会場設営やプログラム進行の支援、写真撮影、後片付け、プログラム終了後の事務処理等、企画から終了までの間多岐にわたって多大な協力を得た。

#### 5.広報活動

当初はオープンキャンパスで参加した高校生にチラシ配布を行ったが、時期が早かったせいか反応があまりなかったため、県内高校にチラシを配布した。その結果、募集定員がすぐ埋まったため、高校側の希望もあり募集人員を40名に増やし対応した。また、実施に当たりプレスリリースを行ったところ、新聞取材を受け、開催記事が掲載された(富山新聞 12/13 掲載)。今後は大学ニュース等で実施内容の報告等をしていく予定である。

#### 6.安全配慮

事前にイベント保険に加入し、事故等に備えた。また、コロナ感染防止のため、当日はマスク着用を義務付け、受付時の手指消毒と体温確認、またトイレ使用後の手洗い消毒や、休憩時の換気を行い、感染予防を徹底した。加えて座席は距離を置き、演習や見学时等のソーシャルディスタンスにも配慮を行った。また当日は保護者や教員の付き添いは避け、高校生とスタッフのみの参加とした。

#### 7 今後の発展性・課題

今回参加した高校生の終了時アンケートからは、ユマニチュードをもっと学びたいという意見や、研究は研究室での実験ばかりと思っていたが、地域でデータを取ることや工学と看護学で連携した研究ができることに興味関心を持ったという意見も多かった。今後はこのような機会を作って多くの若い人たちに多様な研究の面白さを伝えていくことが課題と考える。